

## 兵庫自治学会 平成 20 年度第7回コラボレーション・プロジェクト

### 助成財団シンポジウム ～NPOと助成財団のよりよい関係を考える 対話フォーラム in 関西～

日 時:平成 21 年2月 21 日(土)13 時～18 時

場 所:神戸市勤労会館(神戸市)

#### 内 容:◆講演

「助成財団と NPO の幸せな関係をさぐる」

特定非営利活動法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会専務理事・事務局長 松原明氏

#### ◆報告

特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター専務理事 日比野純一さん

／キリン福祉財団常務理事 国松秀樹さん

特定非営利活動法人マザーサポートの会理事長 藤井啓子さん

／損保ジャパン記念財団理事 今井英雄さん

社会福祉法人まほろば法人本部主任 門口承之亮さん

／日本財団・公益チーム 長谷川隆治さん

#### ◆ディスカッション

「助成財団と NPO の望ましい関係とは」

#### 参加財団・基金

木口ひょうご地域振興財団／キリン福祉財団／しみん基金・KOBE／助成財団センター

損保ジャパン環境財団／損保ジャパン記念財団／電通育英会／トヨタ財団／日本財団

日立環境財団／ひょうごボランティア基金／三井物産環境基金／三菱財団(五十音順)

コーディネーター:荻上健太郎さん(日本財団・情報コミュニケーションチーム)

実吉威(市民活動センター神戸理事・事務局長)

#### ◆交流会

共 催:特定非営利活動法人市民活動センター神戸

NPO 支援財団研究会

企画代表者:実吉 威(市民活動センター神戸理事・事務局長)

#### 【趣旨・目的】

NPO にとって「助成金」はとても頼りになる財源。でもその一方、いくつかの限界・制約もあります。より良い社会をつくるために、NPO と助成財団はどんな関係をつくれるのか——資金源としての助成金の特性とその賢い利用法を学ぶとともに、助成財団と一緒に「これからの助成のあり方」を探ろうと、NPO 支援に力を入れる財団・基金が一堂に会する場を設けました。

NPO は助成金を「いただく」という立場ですが、同時に助成金の「ユーザー」でもあります。助成金のあり方(の 変 革)を真剣に考えている財団の担当者に来てもらい、出し手と受け手の建設的な対話の場をつくりたいと考えました。

## 【基調講演】

NPO はさまざまな資金を得て活動するので、それぞれの資金の特徴をよく理解しておかなければならない。こんな事例があった。海外の熱帯雨林の保全活動を行っていた NPO が、国際的なネットワークが出来てきたことを生かして、3年間にわたって国際シンポジウムを行う、という活動で 3,000 万円×3年間の大きな助成金を受けることになった。それまで2人だった職員を5人に増やして東南アジアを駆け回って、シンポジウムは大成功を収めた。しかし3年間で終わり、助成金も終わってみると、そのあとの活動資金がない。もともとは会費や寄付で 1,500 万円ぐらい集めている団体だったが、3年間はシンポに精一杯で会員や寄付者に対する行動はお留守になっていたため、激減してしまっていた。5人の職員の給料も事務所の費用も出せなくなり、全員解雇、ボランティアベースでの活動に戻そうとしたが、結局活動停止のようになってしまった。はたしてこれは、よい助成だったのか、NPO としてもこの受け方はよかったのか。

NPO にとって資金はいくつかの種類があるが、それぞれの資金の性格をよく知って、よい面と同時にリスクがあることを踏まえて資金獲得していかなければならない。助成金の場合は、ある程度まとまったお金が得られるというメリットと、長くて3年程度しか続かないというリスクなどである。

NPO と助成財団とが「幸せな関係」をつくるには、まずお互いにお互いを知ることが基本で、NPO もみんな違うように、財団にもいろんな考え方・性格があることを知る必要がある。

例えば、募集のしかた<公募型／計画型／待ち受け型>、助成対象<事業／機関>、支払方法<前払い／精算払い>、審査方法<選考委員会／事務局・プログラムオフィサー／その他>、助成期間<単年度／複数年度>、など、それぞれに各財団の考え方が反映されている。

助成財団もミッションを持って、その目的を達成するために NPO とよいパートナーシップを築きたいと考えている。「NPO のための助成金応募ガイド」などで NPO 側も研究するとよい。

パートナーシップを組めそうな財団を見つけたら、今度は申請書をわかりやすく書かなければならない。よくある困った申請書は、問題点を延々と書いているもの。その問題に対してどう解決していこうとしているのか、さらにそれは実現性があるのかどうか、読む相手を説得するのだということを念頭に、よい提案を書いてほしい。



## 【事例報告】

### 1. 特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター／麒麟福祉財団

「多文化な背景を持つ子どもたちによる表現活動」

日比野)以前から取り組んでいる活動だったが、部分的に伸ばしたいところに対し助成を受けた。じつは数年前に「事件」があって関係はよくないと思いこんでいたが諦めないでよかった。実際に活動現場に来てもらって次の展開にも結びつくような意見交換をし、課題を解決するためのパートナーということを実感した。

国松)子育て支援の活動助成であることをよく理解した応募で、ベスト・マッチング。助成した全団体の現場に行けるわけではないが、ちょうどまく訪問できて深い話になり、何度かやりとりした末に非公募による次の事業が始まろうとしている。財団の問題意識と重なるところが大きかった。

### 2. 特定非営利活動法人マザーサポートの会／損保ジャパン記念財団

「パン製造による障害者の自立訓練と収益基盤づくり事業」

藤井)6年前に NPO 法人化の助成を受け、今回また地域の障害児・者の自立支援としてパンの製造販売を行うため、技術指導を受ける費用や高騰した材料費に充てる助成金をもらった。おかげさまでたくさんパンを焼いて、研修の成果が身についてきている。さらに、みんなのモチベーションが上がったことが大きな成果だ。自立支援法への転換を前に、収益事業の基礎を築くことができた。

今井)両助成プログラムとも、意図するところと合致する申請だった。申請書を見るとリーダーがしっかり事業を構築していることがわかり、やりたいことがメッセージとして明確に伝わってきた。

### 3. 社会福祉法人まほろば／日本財団

「まほろばこうべ水耕栽培の機器整備」

門口)知的・精神・重複障害者 100 数十名の通う施設運営を行っている。パンの製造販売がこれまでの主力で、通所者が夢を持てるまでの施設になってきた。重度障害の人のできる仕事を模索して、ようやく水耕栽培を見つけ、機器整備に資金を得て次の夢を叶えようとしている。

長谷川)障害者の支援団体はみな工賃アップに向け努力しているが、重度障害者のための事業にチャレンジする姿勢への共感、また専門家の協力を得るなど実現性が高いと判断したことなどから大型の支援となった。いいモデルになることを期待している。



### 【ディスカッション】

事前に聞いてあった質問への回答も含め、おもに財団側からコメントしてもらった。



### (困る申請書)

- ・課題は詳しく書いているのに解決策や予算が大ざっぱ
- ・連絡先不明、連絡が非常に取りにくい
- ・報告書を提出しない
- ・申請が組織の中で共有されておらず担当者しかわからない
- ・よい企画だったのに、始まってみたら外部委託だった
- ・事業への助成申請はするが、組織の基盤整備には関心が薄い

### (こんな対応・メニューもある)

- ・事務所で直接／電話で申請書の書き方の相談に乗る
- ・申請のための説明会を全国8ヶ所で実施
- ・非公募の助成もある
- ・人件費を30%まで認めている
- ・プロジェクト助成なら期間限定ということで人件費も出すことがある
- ・お金の援助だけでなく、キャパシティ・ビルディングにつながるようなアドバイスも可能

- ・大学生・院生のインターンシッププログラムによる人材支援
- ・助成終了後の課題へのフォロー
- ・自立できる NPO 育成のための、中間支援 NPO への助成

(質疑応答)

参加者) 申請書で財団ごとに異なる様式になっている団体概要の欄を、ある程度統一できないか。

——Web の利用で可能にしようという試みがある

——全国の NPO 法人のデータベースへの記入が申請書とつながる仕組みも進行中

——申請書の団体概要欄は、相手によって書き方を変えてアピールできる場。同じ記載をA財団にもB基金にも、というのはいかがか。

参加者) 先進的な事例、参考例は。

——先進的でも実現可能性がないとダメ。ホームページでも事例を紹介。

——必ずしも先進的でなくてもよい。環境分野だがフィールドの有無に関係なく採択。

——その地域での最初の例なら、他地域ですすでにある活動でも可。先進性といっても財団によりいろいろ。

参加者) NPO 側から財団への適切なコミュニケーションとは。

——機関誌などの送付は、大量なのであまり効果的でない。申請についての相談は、まず応募が相応しいかどうかから。他財団を紹介することもある。また、熱い気持ちはわかるが申請書の範囲でまとめて説得力のある書き方を心がけてほしい。

——ローカルなので、事務所に行って話をしたり場所を見たりできる。人を見るということ。

## 【交流会】

財団ごとにテーブルを配置し、お茶を片手に話の輪が幾重にも広がった。参加者はお目当ての財団を全部まわろうと、時間配分を気かけながらアピールや相談に余念がなかった。財団関係者も「この時間が全体でいちばん大事なところ」との認識で、個別に丁寧な対応がなされた。あっという間の1時間余りを過ごし、閉会とした。



【主催】NPO 支援財団研究会、(特活)市民活動センター神戸

【共催】兵庫自治学会／NPO 会計支援センター／(社福)大阪ボランティア協会

(特活)関西 NGO 協議会／(特活)きょうと NPO センター

(特活)コミュニティ事業支援ネット／(特活)シーズ加古川

(特活)しみん基金・KOBÉ／(特活)市民サポートセンター明石

(特活)市民事務局かわにし／(特活)シンフォニー

(特活)たかとりコミュニティセンター／(特活)奈良 NPO センター

ひょうご市民活動協議会 (HYOGON)

ひょうごボランティアプラザ／(特活)わかやま NPO センター

【協力】アート・サポート・センター神戸／(特活)明石 NPO センター

淡海ネットワークセンター／(特活)関西国際交流団体協議会

(特活)神戸まちづくり研究所／(特活)コミュニティ・サポートセンター神戸

(特活)市民がささえる市民活動ネットワーク (NPO 市民熱人)

(特活)市民未来共社／(特活)しゃらく

ひょうご・コミュニティファンド・ネットワーク